

## 五 遊俠

扱、吉原の事は前の話で大抵分つたが、此吉原に通ふ人間はどんな者であつたかと云ふことを今少し話さねばならぬ。たとへば仙臺侯が吉原に通はれたと云ふことが事實であるとして見た處が何う云ふ風にして通はれたか、繪にある様な若殿様のやうな容體で通はれたか、それとも又さうでないかと云ふことを確かめるには其頃流行の風俗を調べねばならぬ。多分其時分の事を作つたものであらうと思はるゝ、淨瑠璃本に鬼貫といふ惡黨の事を書いたのがある。鬼貫はこの戀の恨で高尾を殺したと書いてあるが、其風俗は髪はがつさうで大髭なで、伊達の小袖を着て、朱裏くわつと吹きかへさせ、大刀をさして廓中をのつき／＼と横行したとある。若しこれが仙臺侯の廓通ひの様子であつたならば、講釋師などがする話とは丸で違つて居つて仙臺侯は柔弱な若殿様でなくて、荒男であつたのである。實はどちらであるか分らぬが我輩の考へる所では荒男の方ではあるまいかと思ふ。尤も荒男と云へばとて、醜き不細工な男と云ふのでない。唯だ荒つぽい風體であつたらうと思ふ。其譯は此時分は人氣が一體に荒つぽくて男達と云ふ者が大層行はれたので、遊郭などは此男達の横行した所であるから、所謂郷に入つては郷に従への格でなま白い顔をした、繪にある様な殿様では多分廓には往かれなかつたことであらう。其時分の男達といふものは誠に盛んなもので、やれ大小神祇組の、やれ吉や組の、やれ唐犬組のなど、色々組を立て、強いものを組頭にして盟約を堅め生命を賭けて亂暴したものである。其中で大小神祇組、吉や組などと云ふのは、若い旗本御家人などの中で同盟したもので、唐犬組など云ふものは町奴の同盟したものである。名高い話で幡隨院長兵衛を殺した水野十郎左衛門と云ふものも立派な旗本で

一 がつさう 額の月代を剃らず、のばした髪を束ねて結つた結髪、總髪。

二 朱裏 衣服の朱色の裏地。

三 町奴 近世初期、江戸で、旗本奴に對抗した浪人・町人などの俠客。

あつて、そして男達をとこだてであつた。正保年中に切腹を申し付つけられた山中源右衛門げんうゑもんと云ふ男も五百石こくで  
大番だいばんを勤めた旗本であつた。

五 わんざくれ、  
六 ふんぞるべいか、今日ばかり

あすはからすが、かつかじるべい

と云ふ名高い歌うたは此人このひとの辭世じせいであると云ふことである。此男達をとこだてと云ふことは幕府でも數しばしばば禁制きんせいしたことであつたが中々やまない。寛文頃の歌にその頃の若い武士の行儀をのべて「寄合よりあふ度は馬咄うまばなし、御番ごばんばなしに三谷さんやぎた、野郎やろうの批判、男おとこだて、生酔なまよひしての死氣しめきだと言ふ口下くちのしたに中なをり」と云つてある。其頃の風俗の殺伐さつぱつであつたことが分る。こんな連中はすること爲すこと一つとして亂暴でないことではない。先づ大まばくちを打つ、辻切つじきりをする、喧嘩けんかをする、花見の時はなみは、幕の内へ飛込んで人を追おひちらす。夢ゆめの市郎兵衛いちろうべゑといふ男達をとこだては一生じやうげ上下によらず、いか様なる強い人でも殿どのだの様さまだのと云はなかつたと云ふことである。斯か様な人が吉原であばれて居る時分ときばんだから仙臺せんたい侯こうも鬼貫おにつらのやうな人であつたかも知れぬ。

其頃の男達をとこだての中には色々の奇行きかうがあつた。史記しきの遊俠列傳いうけふれつでんに儒者じゆしやは文を以て法みだを亂し、俠者けふしやは武を以て禁を犯すものである、そして俠者といふものは、假令たとひ、其行おこなひは義理ぎりに適かなつて居るといふことは出来なくても、言つたことはきつと守り、仕しようと思つたことはきつとする、承合うけあつたことはきつと行ふ、自分の身は何どうなつても決してかまはない、生命いのちをかけて人の危急ききふを救ふのは實に感心であるといふことがあるが、正保寛文頃までの男達をとこだてにも矢張やは斯か様な人物があつた。幡隨院長兵衛はなしかほででも花川戸はなかはどの助六すけろくでも皆斯か様な俠氣けいぎを以て聞えたものである。しかしこれは男達をとこだての善い方のこと許ばかり見たので、勿論もちろん悪いことも澤山ある。第一だいいちすることが如何にも奇を好むやうで馬

四 大番 江戸幕府の組織の一つ。常備兵力として旗本を編成した部隊。

五 わんざくれ ええ、ままよ。

六 ふんぞる そり返つて威張る。

七 かつかじる 掻つ留る。

鹿々々しかつた。或る男達は天氣の善い日でも下駄をはいて居る。腕の庄次郎といふのは額に金字で悪と云ふ字をすり込んで居つた。それから又夏となく冬となく、不斷頭から口元まで頭巾をかぶつて居たものもある。不斷鐵の棒をついて歩行したものもある。又六方を踏んで歩行して居たものもある。或る男達は上方で角力を見物に行つた處が、自分の懇意の角力が負た。すると脇差をぬいて見物の中に飛び込み、今の角力は負た方が勝つたのである、若し眞に負たなど、いふものがあるなら、今此處で言切つて見よ、おのが相手になると怒鳴り出した。何しろ其見脈が恐ろしいのでそれなりになつて、負けた角力を勝角力にしてしまつたさうである。斯様に人の出来ない六づかしいといふ事ならば好んでするといふのが男達の癖であつた。野田の喜三郎といふ男は、片腕をきられたところが、骨に皮が引かゝつて見るしかつた。そこで鋸で切つて棄て、しまつたが、一向平氣で居たことである。それから斯様に亂暴を働くものであるから、めいゝの渾名も誠に不思議なものであつた。死人の何某といふものあり、どらの何某、小唄うたひの何某、首まで切れの何某、はなれ駒、居首、唐犬、前髪、糸びん、一時、澁紙だらなど、いふ奇妙な名がついて居た。言葉は、多かんべい、何だんべいの、べいゝ言葉であつた。江戸言葉のべらんめいなども多分男達時代の轉訛でがなあらう。衣服も其につれて人並ではなかつた。唐大権兵衛は不斷もみ裏、かんぎのすそべりといふ粧ひであつたさうな。外の男達も大抵似たものであつたらう。こんな男がのつきゝと町中を歩行して居た時代の江戸の人氣といふものは中頃の江戸とは丸で違ふ。人氣といふものは丁度時候のやうなもので、春になれば花も咲く、鳥もななく、山から野まで、野から里まで一帯に春めいて来る。それと同じやうに斯様な荒い時代には男でも女でもみんな荒い。市川家の元祖の初代の團十郎が面を白く塗り、朱のくまどりをして荒事

八 見脈 劍幕と同義。

九 もみ 紅色の裏地。

十 かんぎ 空を飛ぶ雁の烈のやうに、ぎざぎざの形をしたもの。

の一流を始めたのも、矢張其時代の餘波を受けたのである。江戸の狂言が始めは荒つぽくつて殺伐であつたのも、畢竟斯様な時代の人氣に育てられたからである。これは此後の話を讀む人に記憶えて居てもらひたい。